

## 文章主義文法指導の実践

著者	小山田 袈裟夫
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 1: 24(1980)
発行年月日	1980-09-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10091/00022346">http://hdl.handle.net/10091/00022346</a>

## 文章主義文法指導の実践

長野市東北中学校教諭 小山田 袈裟夫

1. 文法教育の現状は、文法単元を中心にその知識理解を深める文法のための文法教育の色彩が強かったり、思いつきの「こまぎれ文法」であったりする。この二つの問題点を解決するために、文章主義文法指導は、日常の言語行為、とりわけ読む、書く活動における言語認識の深化をめざし、表現の適否を問う学習の中で文法事実の体験に即した体系的認識を図ろうとするものである。
2. そこでこの指導の基礎作業としては、教材そのものの学習をたしかに深化させるための文法事項を全教材から選定し、体系化しておくことが必要になってくる。(紙面の都合で省略。)
3. 中学二年「黒い御飯」を読むことにおいて進める文法学習事項とその指導。
  - ① 連体修飾の働きと助詞十助動詞の連語「のだ」のもっている意味をとらえることによって深い読みへとつながっていった例。

「貧乏を恨めしく思う涙で、

病気とたたかい生活とたたかう 父や

一年中でのひらがザラザラしている 母や

への感謝の涙では  
なかったのだ。」

小さな時から……つとめ続けてきた 兄たち

今、現在の作者の心情にまでは気づかなかった多くの生徒に、父・兄たちにかかる連体修飾部分や断定、説明を表す連語「のだ」に着目させることにより、しみじみとした深い後悔の気持ちが表示されていることを読みの中でとらえさせることができた。このようにこの文章ではよく出てくるだいたいな連体修飾や連語「のだ」の働きを中心に、呼応副詞の遠い過去への回想表現(きつと〜)や受身形(れる)、助詞「も、ずつ、ほど」等の七つの文法事項をとり上げ読みとりを深めさせた。その結果、生徒の授業後の又文章中の具体的な例で文法をやったので、内容や気持がよく味わいえられたし、書き方にも気をつけて読むようになった。今までとちがって、文法がいやだなあとすることもなく、読みとりを深めていく中でたのしくできた。」等の感想にもみられるように、この指導の大切さを痛感させられたしである。